



## 「クオ・ヴァディス」

クオ・ヴァディスとはラテン語で「(あなたは)どこに行くのか?」と言う意味があります。1896年ポーランドの小説家ヘンリク・シェンケヴィチによって書かれた小説のタイトルがこの「クオ・ヴァディス」でした。この小説は皇帝ネロによる治世下の中で織り成される人間ドラマが描かれています。ローマ帝国の軍人とクリスチヤンの女性の間にある恋愛、堕落した上流階級の生活、そしてキリスト教徒への残虐な迫害の様子も描かれています。その中で必死に信仰姿勢を崩さず殉教もいとわなかったペテロの姿に読者は心を打たれました。この小説は史実(歴史上の事実)ではなく、作者が綿密に当時の歴史を調べた材料を土台にして書かれた物語です。この物語のクライマックスはペテロが殉教に向かって行くところです。

ローマ帝国の迫害が日を追うごとに激しくなり、多くのクリスチヤンは国外へ脱出しました。ペテロは最後までローマに留まるつもりでしたが、周囲の人々の説得によってローマから離れる事に同意しました。夜中頃、ローマを離れて歩き出したペテロでしたが、夜明けの光と共にある人がペテロに向かってやってきました。イエス様です。ペテロは驚き、ひざまづいてイエス様に尋ねました。「主よどこに行かれるのですか?」イエス様は答えました。「あなたが、私の民を見捨てるなら、私はローマに行って今一度十字架にかかるであろう」しばらく気を失っていたペテロですが、この出来事の後、来た道を引き返しローマに向かいました。そしてローマでとらえられ十字架にかけられて殉教したのです。作者はペテロを始めとするキリストの使徒たちの働きにより、実際に福音が拡大していった事を伝えたかったんだと考えます。このような犠牲をいとわなかった信仰姿勢を通じて福音は発展していったのです。

現代の日本のクリスチヤンにとって信仰生活を続けることによって殉教する話は、全くと言っていいほど聞かなくなりました。しかし犠牲の伴わない信仰生活はありません。私達は時間を捧げ、労力を捧げ、金銭や物品を捧げて福音の前進を願います。しかし信仰生活の中でこれ以上の犠牲を払う事に疲れてしまう事があります。それはこの犠牲の先にあるものが見いだせなくなるからです。それを人は失望と呼びます。聖書にあるように、イエス様は苦しまれました。しかし 3 日目によみがえり、栄光を受けられたのです。後に続く弟子たちが苦しみを超えて神の栄光を体験するための十字架なのです。私達の捧げる労力の先に、時間や捧げ物をする先に神の栄光が現わされるのです。十字架の犠牲は私達を苦しめるためではなく、救いに与らせるためです。信仰生活で見つめるべきことは自らではなく神の栄光です。キリストの弟子として共に十字架を追い求める者となりましょう。

